

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

移民文学を通してみたドイツ社会の一断面：  
多文化社会における人間の在り方をめぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1993-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/737">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/737</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 移民文学を通して見たドイツ社会の一断面

—多文化社会における人間の在り方をめぐって—

木戸芳子

## I. はじめに—多文化社会ドイツの一般的状況—

成熟社会あるいは高度産業社会と呼ばれる今日、旧世代においては考えられなかったさまざまな問題状況が顕在化している。その意味で、「人間いかに在るべきか」という哲学上の究極的課題も、今日的な文脈のなかで改めて考え直されなければならないのではあるまいか。筆者が目下抱えている問題意識は、ドイツが現在抱えているさまざまな社会的問題に焦点をあて、そこでどのような深刻な様相が呈されているのか、同時にそれを克服するためいかなる努力が払われているのかを、最近の文学作品等を通して概観することにより、現代的な意味での「人間の在り方」について、日本人の立場から省察してみたい、ということである。

筆者が最近渡独して感じたことを、集約してひとつのキーワードで表現するならば、この国は「多文化社会」(multikulturelle Gesellschaft) であるということである。目下ドイツでは、1. 外国人労働者、2. 難民、3. 旧東ドイツ国民、という3つの異なったグループの存在をめぐり、これら三者と旧西ドイツ国民との間で、複雑に交錯したさまざまな軋轢が、種々の形態をとって露呈されている。

その第一点として、ドイツでは、外国人労働者をめぐって引き起こされる問題を見逃すことができない。今日、ドイツの外国人労働者の数は250万人に達すると言われ、その扶養家族を入れると優に400万人は越えている。彼らの多くは大都市に住み、文化的異質性もあり、なかなかドイツ人社会にとけ込むことができない。彼らは高度成長時代に積極的に受け入れられ、ドイツ経済の底辺部を支えてきた。しかし、とりわけドイツ統一(1990年10月3日)に伴う政治的、経済的、社会的な不安定、失業者の増大、ネオナチの台頭などもあいまって、ドイツ社会では「外国人敵視」(Ausländerfeindlichkeit)の傾向が増幅している。外国人生徒の割合を見ても、ドイツ全体では約10%に達し、ベルリンなどの大都会では、ほぼ4分の1が外国人生徒という構成になっており、学校運営において多くの問題を投げかけている。

また、最近の動向として、ドイツへの難民の流入が目立って増加している。「ベルリンの壁」が崩壊した1989年以来、政治亡命を申請した者だけでも100万人は越えているといわれ、極右勢力などによる暴力的な排斥運動にもきっかけを与えている。

それと同時に、統一の際、東西ドイツ人が共有した「ドイツはひとつ」という一体感はすっかり薄らいでしまったかの感を受ける。『シュピーゲル』誌が行ったアンケート調査によると東の人々の約8割は自分たちを「二流市民」と感じているという<sup>(1)</sup>。また、東の国民の約半数は、「統一後、東西ドイツの間はむしろ疎遠になった」と回答している。こうしたことから、最近「ひとつの国家のなかの二つの文化」(zwei Kulturen in einem Staat)、すなわち「統一ドイツというひとつの国家と、東と西という二つの文化」という言葉で、東と西との間の人々の乖離が語られている。

これに対し、次の点も見過ごすわけにはいかない。すなわち、欧州自由貿易連合(EFTA)と欧州共同体(EC)による欧州経済領域(EEA)の創設、ソ連や東欧諸国の社会主義体制の崩壊、また1992年2月に調印された「欧州連合設立条約」(マーストリヒト条約)にも象徴されるように、今や国籍を越えて、「ひとつのヨーロッパ」に向かって、ヨーロッパ全体が動きつつある、という現実である。

以下こうしたドイツ社会にみられる一般的状況を念頭に、次に述べるような問題設定にしたがい若干のアプローチを試みたいと思う。

## II. 本稿の問題設定

本稿で筆者は、とくにハイディ・レージュ(Heidi Rösch)の論文「異文化間コミュニケーションに対する移民文学とその意味」をとりあげ、同論文に依拠しつつ標記のテーマに取り組みたいと考えている<sup>(2)</sup>。

その際、「はじめに」で言及した「外国人労働者」、「難民」、「旧東ドイツ国民(オッシー, Ossi)」と、「旧西ドイツ国民(ヴェッシー, Wessi)」との間にみられる葛藤とその克服という問題を、異文化間理解(interkulturelle Verständigung)という視点からみてゆきたいと思う。

従来、「異文化間」にかかわる問題は、研究領域としては、現地民(Autochthonen)と移住者(Eingewanderten)との間の「理解」あるいは「闘争」として考えられてきた。そのなかで「就労移民」、「難民」、「(東ドイツから西ドイツへの)亡命者」といった区分がなされてきたわけである(なお、ドイツに生まれ育った彼らの子どもたちも、彼らと同じ範疇に入れられている)。

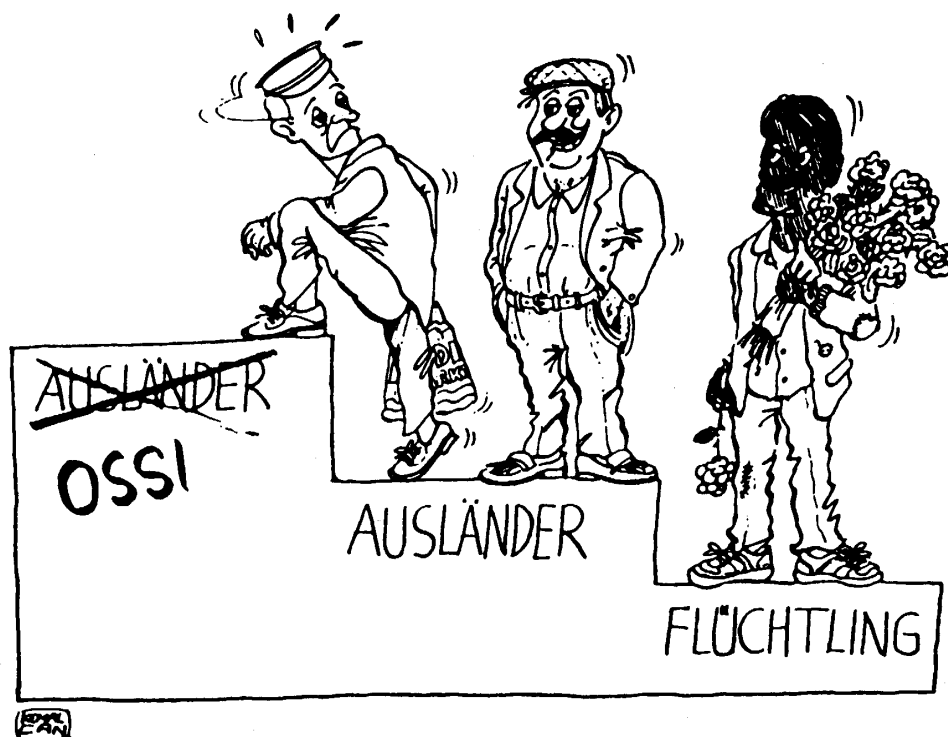
言うまでもなく、かつての東西ドイツの分裂時代、東と西は、全く異なった国家、別々の国民として存在した。統一によって東西は一つの国家となり、法律的には、言い換えれば、建前の上では、「壁」はなくなったはずである。旧東ドイツが、旧西ドイツから「差別」を受けるいわれはまったくないわけである。それにもかかわらず、日常の多くの領域で、両者の間の対立は解消されないどころか、いっそう深刻の度を増していることは、すでに述べたとおりである。現実的には、オッシーはヴェッシーと同じ範疇に入るというよりも、むしろ「就労移民」

や「難民」の仲間とみなされているかの印象をうける。

本稿では、以上のような認識に基づいて、移民文学 (Migrationsliteratur, 移民をテーマとする物語, 詩などのほか, ルポルタージュ, 映画等を含む) と呼ばれるジャンルを, 主な手がかりとして, ドイツにおける, “Autochthonen” (現地民: 旧西ドイツ国民) と “Eingewanderten” (移民: 外国人労働者, 難民, 旧東ドイツ国民) の間の相克が意味しているものを探ってみたいと思う。

### III. 「外国人」概念の変遷

まずひとつの諷刺漫画を紹介することからはじめよう。下に掲げたのは, ケマール・カーン (Kemal Can) という漫画家がベルリンのイラスト入り新聞に描いた漫画である<sup>(3)</sup>。



難民, 外国人労働者, 旧東ドイツ国民 (オッシー) の間の複雑に交錯した関係を, われわれはこの漫画から看取することができる。カーンは, 現在ベルリンに住む諷刺漫画家であるが, 彼の両親はトルコからドイツに移住した移民である。彼はこの漫画によって, 労働移民の「第二世代」が, 社会秩序をどのように把握しているかをテーマとしている。オッシーは, いやいやながら「外国人」の席に向かっている。なぜならオッシーは, ドイツ人そのものであり, 法律上は何ら「外国人」とは見なされていないからである。このことを, カーン自身もちろん知りながら, 「外国人」を「オッシー」と置き換えている。それはなぜか。ここではその前に,

レーシュの所説にしたがいながら、「外国人」という言葉に込められた意味の変遷を見ておくことにしよう。

周知のように、1950年代の経済の復興期に、西ドイツ政府は労働力の不足を解消するため、社会構造上ドイツよりも劣勢なヨーロッパの諸国家から多数の労働者を雇用することにした。これらの人々は、「ゲスト労働者」(外国人労働者, Gastarbeiter)と呼ばれ、いわば、歓迎されるゲストであった。しかしオイルショックを契機に始まった長期不況と失業者の増大の結果、外国人労働者に対する帰国促進政策がとられるようになったのである。こうして、「外国人」という言葉に込められた意味も「変遷」してゆくことになる。

そこで、ジーン・キエリーノ (Gino Chiellino) の「変遷」という詩を引用してみよう<sup>(4)</sup>。彼はイタリア出身の移民で、ドイツに来てからは、ドイツ語でさまざまな詩を書いている。この詩では、「外国人」の概念の「変遷」がテーマとなっている。

変遷	Veränderung
外国人労働者は	ein gastarbeiter
4つの部分から構成される	besteht aus vier Teilen
まず外国人法である	dem Ausländergesetz
滞在許可である	der Aufenthaltserlaubnis
就労許可である	der Arbeitserlaubnis
そして	und
外国人である	einem Ausländer

すなわち、外国人労働者には、「外国人法」が適用される。あわせて彼らは、「滞在許可」と「就労許可」を得なければならない。この三要素が備わってはじめて「外国人労働者」となることができる、というのである。これに対し、旧ドイツ領を追放されたドイツ系の難民や東ドイツからの亡命者に対しては、こうした取り扱いはなされない<sup>(5)</sup>。

「外国人法」、「滞在許可」、「就労許可」という順番は、同時に旧西ドイツ人からみた「外国人」観の「変遷」をも意味している。すなわち、外国人労働者は、「外国人法」を適用される人から、同時に「滞在許可」を必要とする人となった。そしてとくに1980年代になると、外国人労働者に対し、法律上はっきりと「就労許可」というメルクマールが付け加わるのである。いわば、「外国人である」(Ausländer sein) 状態から、「外国人にさせられる」(Ausländer gemacht werden) という質的な「変遷」をとげるのである。

この文脈のなかで、「外国人法」、「滞在許可」、「就労許可」といったメルクマールを必要と

しない、ドイツ系の難民や旧東ドイツからの亡命者たちの西ドイツにおける定住化も進行した。その結果、彼らもまた「外国人にさせられる」という状況に晒されることになった、とレーシユは言うのである。すなわち、「外国人」という言葉が、「第二級の国民」という意味合いを込めて使用される状況が生まれた。こうした事情が、この漫画の背景をかたち作っているように思われるのである。

この漫画に描かれているように、外国人と難民は、オッシーに席を譲り、自分に与えられた場所に堂々と立っている。見るからに自信ありげである。一方オッシーはというと、後ろを振り返りながら、びくびくした様子で外国人の席へと足を掛けている。一体、外国人と難民は、何を喜んでいるのであろうか。彼らは、オッシーの不幸をほくそ笑んでいるのだろうか。それとも、オッシーのことを勇気づけているのか。あるいは、ひょっとすると外国人や難民は、旧西ドイツ国民（ヴェッシー）と共に、オッシーを嘲笑っているのか。以上のような様々な想像に、われわれ読者はかきたてられるであろう。

いずれにせよ、われわれはこの漫画を「異文化間理解」という観点から、ここに掲げてみた。以上を踏まえて、次に、ヴェッシーとオッシーとの「出会い」と、そこで醸し出される両者の「とまどい」について、ひとつのウイットを紹介し、これを「異文化間」の問題として、考察してみることにしたい。

#### IV. 東西ドイツ人の相克

ところで、カーンの漫画を、ヴェッシー（旧西ドイツ国民）は、単純に笑ってよいものだろうか。おそらく率直には笑えないであろう。なぜなら、ヴェッシーは「第一級の国民」として、オッシー、外国人、そして難民の上に君臨していると考えられるからである。この漫画に示された「オッシー」、「外国人」、「難民」という階段は、現在のドイツにおける「社会的な力関係」(gesellschaftliche Machtverhältnisse) を非常に明確な形で象徴的に取り扱っているのである。

この社会的力関係のファクターについて、ドイツの代表的な新聞である『フランクフルター・ルントschau』に掲載された次のウイットを手がかりに考えてみたい<sup>(6)</sup>。翻訳すると次のようになる。

「あるひとりのオッシーが、ヴェッシーに言う。『われわれは一つの国民だ』。これに対しヴェッシーが答える。『そのとおり。われわれもまた一つの国民だ』。」

Ein Ossi sagt zum Wessi: "Wir sind ein Volk."  
"Ja," antwortet der Wessi, "wir auch."

レーシュは、ここで言われている「国民」(Volk)は「文化」(Kultur)と言う概念に置き換えることができるとしている。そうすると、ヴェッシーの言っていることが理解できる。すなわち、ここで言う「文化」の概念は、必ずしも国民、地域、民族、宗教、言語といったものを意味してはいない。むしろ、いろいろな経験、思考構造、イメージの形態、行動をとともなう集団といったものを意味しているというのである<sup>(7)</sup>。

このウイットから次のようなことが明らかとなる。すなわち、オッシーは民族主義的に振る舞い、東西の団結や連帯を念頭に置いている。一方ヴェッシーは、こうした民族主義的要素を拒絶し、それと距離を置くことを主張しているのである。ヴェッシーの民族主義は、人種差別的特徴をもつきらいがある。ヴェッシーは、旧西ドイツの優位性を代表する立場に置かれているのである<sup>(8)</sup>。

ヴェッシーは、オッシーに対する違和感を表現する。ヴェッシーは、オッシーとヴェッシーの一体性の要求は無理な注文であるとして、これを拒絶する。それは、この統一が両者の対等な合併ではなく、東の西へのまさしく吸収合併であったことがその理由として挙げられるはずである<sup>(9)</sup>。要するに、ここではヴェッシーとオッシーは、ひとりの個人としてではなく、それぞれ互いにヒエラルヒー的な関係にある二つの異なった体制の代表者として出会っているのである。そのなかで、より力の強い者であるヴェッシーが、両者の「境界」を定義づけ、その結果、無力な者としてオッシーを排除する傾向が生まれるとも言える。

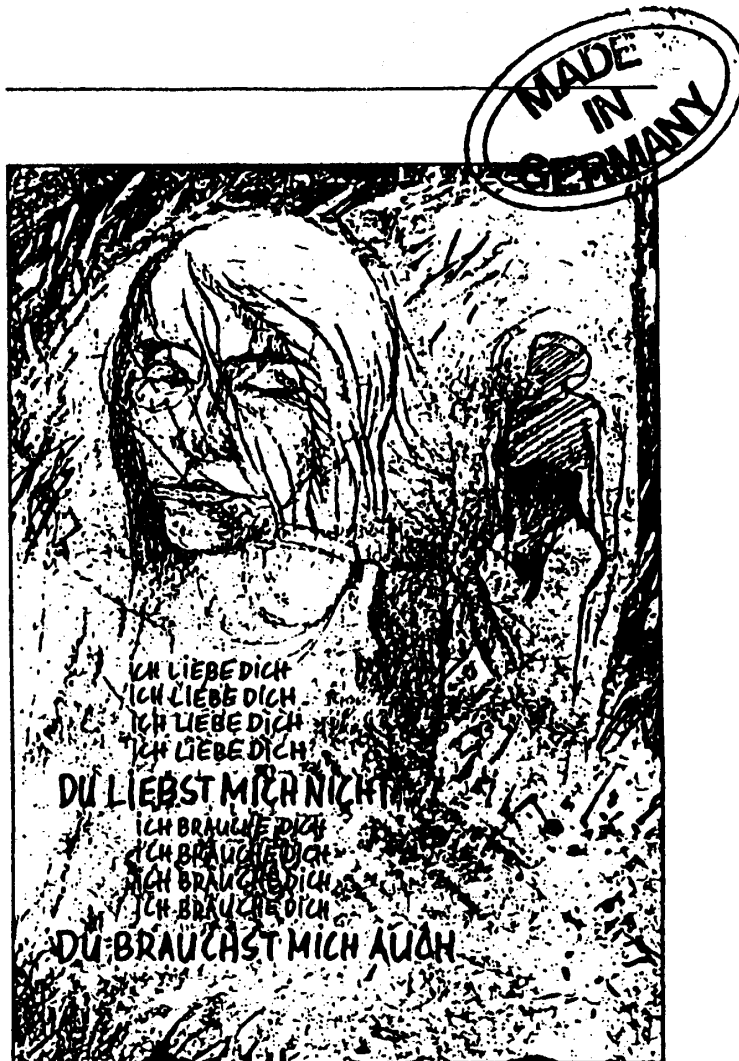
「異文化間コミュニケーション」としてみれば、「異質」とであると決定されることにより、オッシーは、ヴェッシーとは異なったランク、すなわち「第二級の国民」とみなされることになるわけである。

同時にこの図式を用いることにより、先に掲げたカーンの漫画は次のようにも解釈できる。すなわち、かつて移民としてドイツへと渡ってきて、今や西ドイツ市民となっている者たちは、逆に自らを「第一級の国民」と感じ、優越感をもち、気取った態度で、「第二級の国民」であるオッシーたちを笑っている、と考えることもできるのである。少なくとも、移民の「第二世代」であるカーンの眼にはそう映ったのであろう。

## V. 移民労働者とドイツ人との間の相克

次頁に掲げた図版は、アラス・オーレン (Aras Ören) という詩人の作品集から抜粋したものである<sup>(10)</sup>。彼はトルコのイスタンブールの生まれで、のちに外国人労働者としてドイツへとやってきた。彼の作品の主眼は、祖国を離れドイツで暮らす外国人労働者が、ドイツ社会のなかで何を感じ、どう生きているかを、ドイツ人読者を念頭に描写することにある<sup>(11)</sup>。

この絵の中に書かれているドイツ語は次のとおりである。まず、「私は君を愛する」(ICH LIEBE DICH)と4回言っている。これに対し、「君は私を愛さない」(DU LIEBST MICH NICHT)と太字で書かれている。今度は「私は君を必要とする」(ICH BRAUCHE DICH)



という語句が4回言われるが、最後はやはり太字で、「君は私のことも必要としている」(DU BRAUCHST MICH AUCH) という言葉で終わっている。

この詩は、レーシュによれば、たしかに、第一義的には非政治的な「愛の詩」という形態をとっている。しかし、その中身は「支配する者」と「支配される者」との間の関係をまさしくテーマとしているとあってよい。それは、次のように解釈されるであろう。まず最初に、就労移民がドイツ社会に抱く愛があった。しかし就労移民は、やがてこの愛が一方的であり、答えられていないという事実と対決させられた。就労移民は「愛」されてはいないが、「必要」な存在なのである。こうした事態は、少なくとも「パートナーシップ」の関係を想起すれば、両者の幸福な愛の関係の終わりを意味することになるであろう。

それでは、この関係を何とか救う道はないのか。レーシュは、興味ある企てを試みている。すなわち、レーシュは、教え子であるトルコ人の女子学生に、このエーレンの詩を自分なりに解釈させ、それを詩の形で表現するよう促した。そうすると、レーシュにとってはまったく思ってもいなかった次のような詩を、この女子学生は書いたというのである。なぜなら、この女



「君は私を愛している (!)

私は君を愛していない

君は、私が君を必要としていると思っている

ちがう、君がいなくともうまく行くのだ

しかし今君はここにいる

われわれは互いにおり合わなければならないのだ

君は私を欲している

私はそのことを信じない

なぜなら私がそうであるように

君は私を欲していないのだ

そして別のものに私はなりたいとは思わない」

Du liebst mich (!)

Ich liebe Dich nicht

Du meinst, ich brauch Dich

Nein, es ginge auch ohne Dich

Doch nun bist Du da

und wir müssen uns arrangieren

Du willst mich

Das glaube ich nicht

Denn so wie ich bin

willst Du mich nicht

Und anders will ich nicht werden

子学生の詩は、自らを移民という視点に従属させることを欲しなかったという意味で、斬新な内容をもっている、とレーシュは言っている。

このように、はっきりとした「外国人敵視」とまで言い切ることはできないが、少なくとも、外国人労働者たちにみられるイスラム的特徴が色濃く反映した文化に対して、彼女は明らかに距離を置いて語っているのである。とくに、最後のフレーズ「別のものに私はなりたいとは思わない」は、レーシュによれば、「ベルリンの壁」崩壊のあと、東西ドイツの統一への過程で「われわれは、われわれの壁をもう一度もちたい」と書かれたTシャツのプリントの文句として、西ベルリンで広まった言葉にぴったりと一致する、とされている。すなわち、両者に共通するのは、他者によって決定を強いられた社会変革に対する驚愕と、そのなかで何とか現状に固執しようとする態度である。

しかし残念ながら、彼女には、独自の文化的視界への展望が欠けている。彼女は、他者の、経験領域、イメージの世界、思考構造、行動の仕方と自ら取り組むことを拒絶している。彼女は作者エーレンの視野に自らを置こうとしない。彼女自身の視野をテーマにしているにすぎない。しかし、それは彼女が社会構造的に制限されているのであって、彼女の単なる個人的拒絶を意味するものではない、とレーシュは言っている。

ここでもう一度、アラス・エーレンの詩にもどって考えてみよう。重要なことは、現地民を移民に、西ドイツ人（ヴェッシー）を東ドイツ人（オッシー）にというように、互いにその役割を交替してみるとどのような結果が生じるか、ということである。当然大きな抵抗に出会うだろう。なぜなら、それぞれパートナー同士が平等でなく、力関係が決して変更可能なものと

なっていないからである。

このことをここでは、外国人および「異質なものの」の敵視というテーマでもう少し考えてみたい。そこで、次にもうひとつの事例を挙げてみることにしよう。

それは、ライナー・ボイテル (Rainer Beuthel) の詩「何も学んでいない」である<sup>(12)</sup>。この詩では、学校の授業風景がテーマとなっている。なお、この詩が発表されたのは、1981年である。

「何も学んでいない」

ドイツ人の先生から

異化効果

という言葉の意味について質問された  
すばやくひとりの生徒がこう答える：

わたしたちはたしかに

ドイツ人として

昼も夜ももはや

次の人たちに出会うことなしには大通りを歩くことができないということだ

どこかのトルコ人

ギリシャ人、まあいずれにせよ

去らねばならない外国人に出会うことなしに

教師がそのことを正すと

生徒は次のように答えた：

ごめんなさい

この間は欠席していました

ホンコン風邪です

(笑い)

この間は

君はまだ

この世に生まれてもいなかったと

そこで教師は思った

沈黙

nichts gelernt

vom deutschlehrer befragt

nach der bedeutung des wortes

verfremdungseffekt

entgegnete ein Schüler flink :

man könne ja als

DEUTSCHER

zu keiner tages-und nachtzeit mehr

über die Straße gehen,

OHNE IRGENDWELCHEN TÜRKEN,

GRIECHEN, NA JEDENFALLS

AUSLÄNDERN

ZU BEGEGNEN, DIE MÜSSTEN

WIEDER WEG

auf berichtigung des lehrers

antwortete der schüler :

entschuldigung,

hab beim letzten mal gefehlt,

HONGKONG-GRIPPE . . . . .

(gelächter)

beim letzten mal

warst du noch gar nicht

auf der welt,

dachte da der lehrer

STUMM

この詩の表題は、「何も学んでいない」である。それでは、誰が、どんなことを、「学んでいない」のか。レーシュにしたがいこの詩の意味を解釈してみよう。

まず考えられるのは、「学んでいない」のは、人種差別的な発言をしている当の生徒である。この生徒は、教師に逆らっている。他の生徒も、この生徒の発言に何ら異論を唱えることなく笑うだけである。つまり、クラスの生徒たちもこの生徒の言うことをバックアップしているように見える。したがって、表面的にだけ捉えれば、生徒たちの「人種差別」が弾劾されてしか

るべきかもしれない。

しかし教師はというと、生徒の答えを「訂正」はするが、その生徒の発言に込められた背景を理解しようとしなない。その結果、この生徒は、教師の叱責のことばと訂正の要求を再び拒絶することになるのである。「笑い」は、おそらくこの生徒の人種差別的な発言に対してだけでなく、教師の挑発にも向けられている。したがって、この教師は「異文化間教育」の視点と同時に一般教育の視点からみても、重大な誤りをおかしている、というのがレーシュの解釈である。

さらに言うなら、教師は、こうした生徒の発言の背後に潜むものを引き出すチャンスを逃している。教師は、生徒が言う「この間は」(beim letzten mal) という言葉を受けて、自分でもこの“beim letzten mal”というフレーズを使って、「この間は」、すなわち「ヒトラーの第三帝国の時代」を思い浮かべるのである。そして、この時代には、「(君たち生徒は) まだこの世に生まれてもいなかった」と思うのである。しかし、教師は単に「思う」だけで、それを言葉に発することなく、ただ「沈黙」(STUMM) するのみである。このように、教師は、この生徒の発言に対する自らの考えを何ら語らず、したがってこの問題をこれ以上論議しないまま通り過ぎてしまっている。かくして、「何も学んでいない」のは、まさに教師自身であるとも言えるのである。

外国人問題に対する思考とイメージは、教師と生徒の間で明らかに異なっている。行動の仕方もまた、別々である。つまり、すでに述べたように、生徒は大声で挑発的に彼の意見を発表している。これに対し、教師は自らの意見を公表することなく沈黙しているのである。このように、生徒と教師の間で「異文化間コミュニケーション」という相互行為が機能していない。なぜなら、両者はいずれも自らの「文化的枠組み」を越えておらず、自分とは別の文化的枠組みと対決することにつとめていないからである。この相互行為は、双方の共通部分の間に見られる優位関係を反映しており、この教師は優位な立場へと引きこもってしまっているのである。一方、生徒は自分の意見が押しえ付けられたことに抵抗はするが、教師に対しては、少なくとも教室内では従っているのである。この例で明らかになることは、「異文化間コミュニケーション」の際に、「正しい」立場だけが問題なのではなく、まず彼の立場を理解することも肝要なのであるということである。この詩から、われわれは、以上のような示唆を与えられるのである。

## VI. 「異質な人々」との融合は可能か

最後に、旧東ドイツの作家アーデル・カラショリー (Adel Karasholi) の詩「ひとり沈黙しなかった」(Einer schwieg nicht) を取り上げ、そこに盛り込まれている意味を考えてみよう<sup>(13)</sup>。カラショリーは、シリアから東ドイツに移住してきた作家である。なお、この詩が出版されたのは1984年である。

「ひとり沈黙しなかった」

—Gのために—

私を理解する人はたくさんいる  
私を理解しない人はたくさんいる

私を理解しない人は  
叫ぶけれども  
私を理解する人は  
沈黙する

私は私を理解しない人を理解する  
もしこの人たちが叫ぶならば  
私は私を理解する人を理解しない  
もしこの人たちが沈黙するならば

私を理解する人は沈黙するので  
私は叫ばなければならない  
私は叫ぶので私は理解されない  
私を理解している人から

私を理解している人たちのひとりが  
私の不安な叫び声を聞いた  
すると沈黙しなかった  
彼は黙殺された

Einer schwieg nicht

Für G.

Viele sind es die mich verstehn  
Viele die mich nicht verstehn

Obwohl die mich nicht verstehn  
Schreien  
Schweigen  
Die mich verstehn

Ich verstehe die mich nicht verstehn  
Wenn sie schreien  
Ich verstehe nicht die mich verstehn  
Wenn sie schweigen

Weil die mich verstehen schweigen  
Muß ich schreien  
Weil ich schreie verstehen mich nicht  
Die mich verstehn

Einer von denen die mich verstehn  
Hörte meinen Angstschrei  
Und schwieg nicht  
Er wurde überschwiegen

カラショリーの語るところによれば、彼がシリアから東ドイツに移住した当初は、旧東ドイツ政府からの保護を受け、彼の作品は共産党の機関紙でもあった『ノイエス・ドイチュラント』などに掲載された。しかしほどなくして、彼は東ドイツにおける「指令された連帯」(verordnete Solidarität)の本質にうんざりした。そして、彼は文壇から去り、忘れられたという。レーシュは、こうした事情が、この詩のなかにみられるカラショリーの「諦念」の理由となっていると言っている。

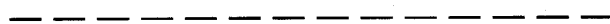
この詩のテーマは、「沈黙」である。したがって、この作者が、どんなことを、誰に対抗し、何のために、叫んでいるのか、ということは読者に対し未解決のままである。しかし、作者がこうした「沈黙」と言う形をとっている事情は、当時の東ドイツにみられた特殊な状況を考え

れば十分に察しがつく。レーシュによれば、このことが、この詩をエーコ (Eco, Umberto) が言う意味での「開かれた芸術作品」(offenes Kunstwerk) にしているという<sup>(14)</sup>。すなわち、芸術作品は読者の受容と解釈を通して、はじめて理解されたことになるのである。それゆえ、この詩のなかで、「沈黙」のままになっているところは、読者がこれを埋めてゆかなければならないのである。

以上のことは、われわれが、この詩を「異質なものへの敵視」というコンテクストの中で読む自由も与えてくれる。例えば、「敵」なのか「友人」なのかは、一体どこで区別できるのかといった問題も、この観点から見てゆくことができるであろう。

まず第1連では、外国人を敵対視する人も、外国人に友好的である人も、それぞれたくさんいる、と言っている。これに対して、次の連では、われわれ読者の予想に反して、作者の「敵」に対する彼の「友人」たちの態度を批判している。「敵」が外国人を誹謗する流言を叫ぶにもかかわらず、作者は第3連で、さらに「敵」に近づいてゆくのである。そして、第4連ではじめて、作者は、彼の「敵」に向かって、この流言に抵抗するために叫ぶのである。しかし、作者のこの態度は、「友人」たちから作者を遠ざける結果をもたらすのである。最終的に作者はひとりぼっちとなり、恐怖のあまり悲鳴をあげるに至るのである。たしかに作者の友人の一人が彼を助けにくる。しかし、時はすでに遅く、作者は、友人たちから黙殺されてしまう。この詩の最後の部分では、先に取り上げたライナー・ボイテルの詩「何も学んでいない」に登場する教師にみられるのと同様に、変革への関心が薄れ「諦念ムード」が支配的となっている。

この詩のこうした流れのなかで、作者が一体何を叫んでいるのか、読者にもう一度熟考する余地が与えられるのである。すなわち、「G」の視点からこの話を再現し、話に肉付けをしてゆくことが可能となり、読者の解釈の幅がより「開かれた」ものとなる。このような様々な解釈の可能性が広がるならば、「諦念ムード」を建設的な方向へ導くことができるかもしれない。



以上、ハイディ・レーシュの所論を典拠にして、外国人労働者、難民、旧東ドイツ国民、旧西ドイツ国民との間にみられる葛藤とその克服という問題を、主として移民文学といわれる作品の解釈を通して考察してみた。

それでは、こうした「異質なもの」に対する敵視を、われわれはどのようにして克服してゆくことができるのであろうか。それは、敵視されている人たちとの単なる「連帯」や、彼らへの「感情移入」により解決できる問題ではないことは言うまでもない。「異質な人々」と理解しあえるために、われわれは、互いの共通の視点を発展させることを学ばなければならない。そしてこの「異質な人々」の範疇には、異なった文化的、宗教的背景をもった人々だけにとどまらず、往々にして上に紹介したカラショリーの詩に登場する「友人」たちもまた含まれていることを忘れてはならないであろう。

きわめて常識的な結論かもしれないが、レーシュは彼女の所論の最後で、こうした問題に取り組むにあたり、次の3点がその出発点になると強調している。

- (1) その折々の異質性をより厳密に観察し、その背景にあるものを探ること。なぜならば、表面的な相違の背景には、非常に多くの共通点が見られるということが確信されるからである。
- (2) 東西両ドイツ間にみられるヒエラルヒーの克服は、まさしく移民と現地人とのヒエラルヒー的關係と相似していることに思いを致すこと。
- (3) ドイツ民族という枠を越えて、積極的な同等の権限をもったパートナーとして、民族的少数者とドイツ人が共に探究できる共通の視点を展開すべきであるということ。

## VII. 多文化社会における人間の在り方—「おわりに」にかえて—

本稿では、ドイツのいわゆる「移民文学」の事例を考察の対象とした。ここでは、筆者の今後の課題として、わが国の作家が、ドイツに在住する外国人として、ドイツ語で自己の体験を文学的に表現することのもつ意味について、「異文化間理解」という観点から若干の考察を試み、「おわりに」に代えることとしたい。

その際、「犬婿入り」というきわめてユニークな作品で、最近第108回芥川賞を受賞した多和田葉子氏を例に挙げ、この問題に迫ってみたいと思う。彼女は、1960年の生まれで、早稲田大学ロシア文学科の出身である。大学を卒業するまでは、ずっと東京で過ごしたが、その後、ハンブルクに在住し、日本語だけでなくドイツ語でも創作活動を行っている。あるエッセイのなかで彼女は次のように言っている。

「一九八八年、わたしは初めてドイツ語で小説を書いてみた。……もちろん、わたしの書くドイツ語は、ドイツ人の書くドイツ語とは違う。ちょっと抜けている、つまずきそうな、変なドイツ語なのだろうと自分では思っている。だからこそ書くかがあるのではないかとも思う<sup>(15)</sup>。」

たしかに彼女も言うように、「ドイツ語で書くのは、……すごく大変」なことであろうが、それ故にかえって文章の「素朴さ」にもとづく力強さを通して、作品に描かれた内容のもつ切実さが、より鮮明に浮彫りにされる面もあるように思われる<sup>(16)</sup>。

彼女の文壇へのデビュー作は、第34回群像新人文学賞（1991年）の受賞作「かかとを失くして」である。この作品について、選者の一人柄谷行人氏は次のような選評を書いている<sup>(17)</sup>。『『外国』体験の小説はたくさんあるが、ここに書かれているのは、いわば『移民』あるいは『難民』の体験の凝縮というべきであろう。『かかとを失くして』とは、『浮き足立つ』とか『地に足がつかない』という言葉（夢がそうするように）文字通り形象化したものといっているかもしれない。』

柄谷氏の以上のような批評にしたがうと、彼女がその翌年発表した「ペルソナ」も、われわ

れが本稿においてその拠り所とした「異文化間理解」という観点からすると、すぐれて今日的な問題を含んだ注目すべき作品であるといつてよいであろう。

「ペルソナ」の一節を引用してみよう。まず、作者はこの小説の主人公である道子のプロフィールについて、次のように書いている。「ドイツの現代文学はドイツ人だけが作っているものではないから研究者の方もドイツ人だけでは困る、と道子は考えていた……道子は、ドイツに住みドイツ語で小説を書いているトルコ人女性作家について論文を書いているのだった<sup>(18)</sup>。」

このように道子を設定することによって、作者もまた、ドイツという「異質の社会」で、外国人が母国語でなく異国の言葉で小説を書く意味とは一体何であろうか、と自問しているように思われる。

また桂秀美氏は、この小説の主題は「日独の粗齧とか、東アジアとマイノリティーの皮膚的な、具体的なレベルの葛藤」であるとしている<sup>(19)</sup>。たとえば、道子がシュタイフというドイツ人女性に対し、「ドイツ人だって外国へ行けば外国人ですからね。」と言うと、彼女は「少し傷ついたような顔をして道子を見た」と書かれている<sup>(20)</sup>。この箇所なども、桂氏の言う意味で読むと大変興味深い。

すなわち、ドイツ人も外国に行けば外国人であるが、ドイツにいる外国人労働者は、外国にいるドイツ人とは明らかに異なった取り扱いを受けている。この作品のなかで、セオンリョン・キムという韓国人をめぐる、「東アジア人」に対する偏見が語られるが、ドイツ人の眼から見れば、韓国人も日本人も区別がつかない。このことは、日本人がドイツ人とオランダ人を区別できないのと同様である。この関連でいうと、平和運動のキャンペーンとしてよく引用される「すべての人間は外国人である。それもほとんど至る所で！」(Alle Menschen sind Ausländer, fast überall) というキャッチフレーズがある<sup>(21)</sup>。この言葉は、ドイツ人が外国人との共存を唱える場合にしばしば使用されるものである。このキャッチフレーズで言われている「外国人」という概念のもつ意味を、多和田葉子氏の一連の作品のコンテクストのなかでもう一度吟味してみるならば、本稿で紹介したような課題の考察に、またひとつの新たな知見を加えることができるのではあるまいか。

ここではこれ以上論ずる余裕はないが、彼女の作品には、日本人が「異邦人」として「異質な人々」との様々な出会いを通して、自己のアイデンティティーを確認してゆくプロセスと、そこにおけるレーゾン・デートルとは一体何かという問題が、きわめてシンボライズされた彼女独特の文体で描かれているように思われる。

こうした諸問題を、本稿でみてきたような視点からいずれ機会を改めて考察したいと思う。

(本学助教授＝ドイツ語担当)



## 注

- (1) Vgl. *Der Spiegel*, Nr.30/1991, S.24 ff.
- (2) Vgl. Heidi Rösch, „Migrationsliteratur und ihre Bedeutung für die interkulturelle Kommunikation“, In: Helga Marburger (Hrsg.), *Schule in der multikulturellen Gesellschaft, Ziele, Aufgaben und Wege Interkultureller Erziehung*, 1991  
ドイツでは周知のように1955年以降イタリアを皮切りに、スペイン、ギリシャ、トルコ等々といった国々と順次二か国間協定を締結し、外国人労働力の導入を開始した。しかし1973年のいわゆる石油危機を契機に外国人労働者の受入れは停止された。ドイツ政府は公式には「ドイツは移民受入れ国ではない」という立場をとり、外国人労働者はいずれ帰国することを仮定しているが、現実には、彼らは「事実上の移民」(De-facto-Einwanderer)とみなされている。周知のようにドイツは国籍に関し、フランスのような出生地主義ではなく、血統主義を採用しており、親が外国人である場合、ドイツで生まれた第二世代も、たとえ永年ドイツに定住してもドイツ国籍を取得することは容易ではない。またドイツ国籍を取得した場合、現国籍を放棄しなければならない(東京都議会議員局『欧米における在住外国人の権利保障——特にその政治的社会的参加の権利をめぐる——』平成4年10月を参照)。
- (3) Vgl. *Zitty-Illustrierte Stadtzeitung Berlin* Nr.10/1991, S.155
- (4) Vgl. Chiellino, Gino: *Mein fremder Alltag*. Gedichte, Kiel 1984, S.13
- (5) ドイツ連邦共和国基本法第116条によれば、第二次世界大戦が勃発する以前の1937年12月31日の時点でドイツの領土に居住していたドイツ人及びその子孫もまたドイツ国籍を有するとされている。したがって、彼らはいつでもドイツ人として、ドイツに「帰国」することができる。
- (6) Vgl. *Frankfurter Rundschau*, im April 1991
- (7) あわせて次の文献も参照。Redder, Angelika / Rehbein, Jochen: „Zum Begriff der Kultur“, In: *Osnabrücker Beiträge zur Sprachtheorie* Nr.38/1987
- (8) 連邦憲法擁護庁の調査によれば、ネオ・ナチなどによる外国人襲撃事件は、昨年(1992年)1年間で2,033件にのぼったという。とくにこうした外国人排斥の風潮が、旧東ドイツ地域で顕著であることも特徴的である。外国人の人口比でいうと、旧西ドイツが約9%であるのに対し、旧東ドイツは1%に満たない。また旧東ドイツの人口は、全ドイツの人口の2割弱にすぎない。そのなかで旧東ドイツ地域に、とりわけ外国人を敵視する傾向が顕著にみられる要因のひとつとして、旧東ドイツ国民(オッシー)が旧西ドイツ国民(ヴェッシー)から「第二級の国民」と蔑まされていることも挙げられている(なお、「オッシー」という呼び方には、旧東ドイツの国民を侮蔑する意味合いが込められている)。その一例として、今年(1993年)2月にドイツ公共放送連合(ARD)が制作した「モッツキ」(Motzki)という、ヴェッシーがオッシーを口汚く罵るテレビドラマが放映され、旧東ドイツの国民を中心に抗議の声が続出した。「モッツキ」というタイトルは、「絶えず不平を言う」という意味の“motzen”をもじったもので、このドラマの主人公であるモッツキが、オッシーを徹底的に罵倒するという筋書となっている。しかしモッツキが言っていることは、むしろ旧西ドイツ国民の本音であるとする見方も少なくなかったようである。Vgl. *Der Spiegel*, Nr.6/1993, S.213 f.
- (9) たとえば、現代西ドイツを代表する作家ギュンター・グラス(Günter Grass)などは、東西両ドイツは二国からなる連邦制をとるべきであると主張した。しかし、国民の熱気が統一に向けて加速度的に盛り上がっていくなかで、グラスのような意見は全く顧みられなかった。遠山孝義「転換期のドイツ文学」(『群像』1991年6月号所収)を参照。なお、グラスの考え方は、Günter Grass: *Deutscher Lastenausgleich, Kurze Rede eines vaterlandslosen Gesellen, Schreiben nach Auschwitz*, Luchterhand 1990を参照。同書の翻訳としては、高木研一訳『ドイツ統一問題について』中央公論社 1990がある。
- (10) Vgl. Ören, Aras / Nieblich, Wolfgang: *Ich anders sprechen lernen*, Berlin, 1983, S.17
- (11) アラス・エーレンについては、日本ドイツ学会機関誌『ドイツ研究』第15号(1992)に所収され

たシンポジウムの記録「ドイツの中の外国人—異文化共存から多文化社会へ—」における足立信彦氏の発表記録を参照。なお連邦統計局の調査では、昨年（1992年）現在の在住外国人の出身国別の内訳をみると、トルコ出身者がトップで185.5万人、続いて旧ユーゴの91.6万人となっている。ドイツにおける最近のトルコ人問題を扱った特集記事として、たとえば „Die Deutschen Türken, Opfer des Fremdenhasses“ In: *Der Spiegel*, Nr. 3/1993, S. 16 ff. を参照。

- (12) Vgl. Beuthel, Rainer: „nichts gelernt“, In Christian Schaffernicht (Hrsg.): *Zu Hause in der Fremde. Ein bundesdeutsches Ausländer-Lesebuch*, Fischerhude, 1981
- (13) Vgl. Karasholi, Adel: *Daheim in der Fremde. Gedichte*, Halle / Leipzig, 1984 S. 54 f.
- (14) エーコ（1932～）は、現代イタリアの著明な美学者、言語学者、記号学者として、わが国でもよく知られている。また、とくに1980年には、小説『薔薇の名前』を発表し、後に映画化され話題となった。なお、『開かれた作品』（篠原資明、和田忠彦訳）青土社、1984年も参照。
- (15) 特別エッセイ「〈生い立ち〉という虚構」（『文学界』1993年3月号所収）37ページを参照。
- (16) 同上
- (17) 『群像』1991年6月号93ページを参照。
- (18) 同上誌1992年6月号192ページを参照。
- (19) 同上誌1992年7月号「創作合評」351ページを参照。
- (20) 同上誌1992年6月号199ページを参照。
- (21) Vgl. Heidi Rösch, *a. a. O.* S. 149